■令和８年度第１回和歌山県スポーツ推進審議会　議事録【概要版】

日　時：令和８年７月 31 日（金）10：30～12：00
場　所：ホテルアバローム紀の国　３階　孔雀の間

◆出席者：村瀬　浩二 会長（学識経験者）
生駒　享（県スポーツ振興財団専務理事）
梅田　千景（県スポーツ協会副会長）
太田　英一郎（県中学校体育連盟会長）
川口　勝也（県高等学校体育連盟会長）
川畑　豪則（県小学校体育連絡協議会会長）
阪本　憲二（障害者スポーツ代表）
筋師　光博（県スポーツ推進委員協議会会長）
成瀬　裕之（県 PTA 連合会会長）
坂東　あつみ（女性スポーツ代表）
南　　由佳（学識経験者）
森下　順子（学識経験者）
山﨑　美加子（スポーツ選手・指導者代表）

◆事務局：北村 企画部長
木村 企画政策局長
スポーツ課　　中嶋 スポーツ課長
山本 副課長
服部 副課長兼総務管理班長
髙尾 生涯スポーツ班長
上野 競技力向上推進班長
安井 ワールドマスターズゲームズ推進室長
増野 ワールドマスターズゲームズ推進室課長補佐
岡田　 総務管理班主査
健康体育課　　中谷 健康体育課長

◆議事

１　開会

委員 17 名のうち 13 名で過半数出席。

よって和歌山県スポーツ推進審議会条例第 4 条の規定により、本会議が成立。

２　企画部長挨拶

当審議会は本県のスポーツ推進計画の策定・推進を目的としており、本日はワールドマスターズゲームズ 2027 関西の準備状況等を説明させていただく。

審議事項として、次期和歌山県スポーツ推進計画の策定について審議をいただく。

当審議会が本県のさらなるスポーツ振興に繋がる有意義な会議となるよう、皆様から忌憚のないご意見をお願いする。

３　報告事項

（１）第 26 回和歌山県障害者スポーツ大会及び第 25 回全国障害者スポーツ大会「青の煌めきあおもり障スポ」について

資料 1-1 及び 1-2 により、事務局（髙尾　生涯スポーツ班長）が説明。

（２）第 80 回国民スポーツ大会青の煌めき国民スポーツ大会及び近畿ブロック大会について

資料 2-1 及び 2-2 により、事務局（上野　競技力向上推進班長）が説明。

（３）ワールドマスターズゲームズ 2027 関西について

資料 3 により、事務局（増野　ワールドマスターズゲームズ推進室課長補佐）が説明。

（４）令和 8 年度全国高等学校総合体育大会について

資料 4 により、事務局（中谷　健康体育課長）が説明。

【質疑応答等】

（村瀬会長）

ワールドマスターズに関して。ボランティア募集の登録は始まっているのか。

（増野ワールドマスターズ推進室課長補佐）

6 月に入って開始し、いい勢いで、ボランティアのエントリーをいただいているが、今少し落ち着いている。今後は各協賛企業様、ジュニア駅伝の関係でボランティアの協力いただいている方、大学、専門学校の方、国際交流センターなど回っているような状況。

（成瀬委員）

広報活動について（1）から（8）まで見ると、色々なところでタッチポイントを増やしていると思う。今後も各種団体のイベントで、パンフレットやボランティア募集のチラシを配布する

などは考えているのか。青年中央会という団体に入っているので繋ぐことができる。

（増野ワールドマスターズ推進室課長補佐）
今後も各種開催市町のお祭りやイベントにもPRしていく。ご協力願いたい。

４　審議事項
（１）次期和歌山県スポーツ推進計画の策定について
資料5-1及び5-5により、事務局（岡田　総務管理主査）が説明。

【質疑応答等】

（成瀬委員）
小学校5年生に比べて中学校2年生の体力テストの全国順位が低下し、国民スポーツ大会の成績も下位にある。勉強等の増加などが影響している。全国的に同じ話だと思うが、順位低下の具体的な原因を把握しているのか。

（中谷健康体育課長）
体力テストの順位だけで評価せず、コロナ禍前からの体力の回復状況や運動時間の減少、スクリーンタイムの増加などを総合的に捉える必要がある。今後は順位や数値よりも、子どもたちの運動・スポーツへの「愛好度」を高めることを重視する。特に小学校では、体育指導に不安を抱える教員への支援として、現場と連携して分かりやすい指導手引を作成する。

（中嶋スポーツ課長）
国民スポーツ大会の男女総合成績は、わかやま国体時の1位から令和6年度には47位まで低下した。主な要因として、国体で活躍した選手の競技離れなどが挙げられる。
県では、県ゆかりの選手への出場勧誘、優秀な指導者の派遣、ジュニア選手の育成、新しいスポーツへの関心を高める取組など、競技力向上を進めている。

（村瀬会長）
体力テストの順位に過度にこだわるべきではないが、中学校で順位が大きく低下している点について、コロナ禍で運動機会を失った世代が中学生になったことの影響が考えられる。中学生の運動習慣や体力の現状についてどうか。

（太田委員）
コロナ禍の影響は大きく、特に女子生徒は運動に親しむ習慣が弱い傾向が見られる。学校現場でも、女子の運動習慣には課題があると感じている。

（村瀬会長）
コロナ禍による影響は運動不足にとどまらず、人と接する機会の減少など、子どもたちの社会性や将来の社会生活にも影響を及ぼす可能性がある。中学生に見られる課題を、体力面だけでなく幅広く捉える必要がある。

（川畑委員）
スクリーンタイムの増加に加え、熱中症警戒アラートなどにより屋外での運動機会が減少している。水泳などの活動も十分に実施できない場合があり、全国的に子どもたちの運動離れや部活動加入率の低下が進む中、特に本県の中学校女子の体力・運動習慣に課題が見られる。

（村瀬会長）
子どもたちの体力や運動状況は、コロナ禍以前の水準まで回復していないと考えられる。熱中症警戒アラートにより屋外活動や水泳が制限され、運動機会が減少している。体育館へのエアコン整備状況についてはどうか。

（川畑委員）
和歌山市内のすべての中学校は設置済み、和歌山市内の小学校のは 3 分の 1 程度だと思われる。

（村瀬会長）
ゴールデンキッズからやっ Cha る!!への移行と国民スポーツ大会の順位低下との直接的な関係はないとしつつ、やっ Cha る!!による選手育成が順調に進んでいるのか

（上野競技力向上推進班長）
やっ Cha る!!は参加者数の減少が課題となっており、今年度は内容を見直し、より多くの子どもに運動の楽しさや自分に合う競技を体験してもらうことを目指している。体験をきっかけに、ライフル射撃やボクシングなどの競技団体に所属した事例もあり、一定の成果が出ている。今後も、子どもたちを適性のある競技につなげ、将来のアスリート育成につなげるため、事業の改善を続けていく。

（山本副課長）
やっ Cha る!!は現在、2 年間で 2 回実施されており、参加者の進路や成果について調査中である。具体的な人数は未把握だが、体験を通じて競技団体に所属し、全国大会に出場している選手もいる。ゴールデンキッズとは異なり、直接競技団体につながる点が特徴である。

（村瀬会長）
主要部分である 12～17 ページの内容と 13 ページの具体案についてどうか。

（川口委員）
国の計画を参考にしつつ、和歌山県の人口減少や部活動、私立高校・クラブチームの少なさ、地域展開における指導者不足など、県固有の課題を反映した計画にしてほしい。
県内にプロスポーツチームがない中で、プロチームのキャンプ誘致やスポーツ施設の整備、まちづくり部門との連携による誘客など、スポーツ関連産業との連携をどのように進めているのか。

（中嶋スポーツ課長）
国の計画を参考にしつつ、人口減少や部活動、指導者不足など、和歌山県固有の課題を反映した施策を検討する。施策の具体化にあたっては、委員からの意見も取り入れる。
プロスポーツについては、県内にプロチームがないため、民間主体の取組と地域の盛り上がりが重要である。県としては、老朽化したスポーツ施設の再編や整備のあり方について、まちづくり関係部局と連携しながら検討していく。

（森下委員）
兵庫県のフィギュアスケートの事例を踏まえ、選手育成には、競技団体・自治体・企業が長期的に連携することが重要と考える。和歌山県では、人口や施設面の課題を踏まえ、県らしいスポーツの検討や企業との連携、競技団体と県の協力強化が必要。
また、子どもたちがスポーツを「する」だけでなく「見る」機会を増やすことや、ラジオ体操・ウォーキングなど、地域で日常的に体を動かせる環境づくりも重要ではないか。

（村瀬会長）
プロスポーツに限らず、アマチュア競技も含めて、継続的に観戦できる環境や地域で応援・交流できる場が重要である。特に、月 1 回や週 1 回など定期的に活動するチームがあれば、県民の愛着や関心の向上に繋がる。
バスケットボールやサッカーなど、今後具体的に目指せる競技はあるのか。

（中嶋スポーツ課長）
プロスポーツを目指すチームとして、サッカーではアルテリーヴォが地域リーグで活動している。J リーグ入りには、まず JFL を経て J3 を目指す必要があり、実現には段階的な取組が必要である。バスケットボールでは、ワンリーズがアマチュアトップレベルの SB1 リーグで昨年度 4 位、トライアンズが下部の SB2 リーグで活動している。現時点では、サッカーとバスケット

ボールがプロ化に近い競技と考えられている。

（生駒委員）
次期計画では、現行計画の「個人」に焦点を当てた目指す社会から、「地域に活力と交流が生まれる社会」へと方向性が変化しているように見受けられる。この変更が意図的なものか。

（中嶋スポーツ課長）
次期計画の目指す社会像は、国のスポーツ基本計画を踏まえて設定した。個人を重視する考え方は維持しつつ、誰もが自分らしくスポーツを楽しめる社会を目指している。スポーツを「する・見る・支える・集まる・つながる」など多様な形で楽しむことを通じて、県民の交流を促し、和歌山県全体を活性化することを目指す。

（南委員）
現行計画の「個人」に焦点を当てた考え方に、「集まる・つながる」という要素を加えることで、個人のウェルビーイングの充実から社会的交流へとつながるのではないか。一方で、地域社会を重視した目指す社会像では、県民一人ひとりが自分に関係する計画だと感じにくくなる可能性がある。個人と社会のつながりをどのように表現するのか。

（中嶋スポーツ課長）
目指す社会像には、個人と地域の両方の意味を含めている。前半の「誰もが自分らしくスポーツを楽しむ」は個人の充実を、後半の「スポーツ活動を通じて地域に活力と交流が生まれる社会」は地域の活性化を示している。つまり、一人ひとりがスポーツを楽しむことと、その活動を通じて地域全体が活性化することの二つを目指している。

（阪本委員）
小・中学生の体力や競技力の向上には、学校体育の充実が基本である。中学校で部活動のない競技が増え、民間クラブが担う状況もあるが、学校体育は将来の競技力や国体出場にもつながる重要な基盤。そのため、スポーツ推進計画の策定には教育委員会や学校関係者が十分に参画し、小・中学校の体力向上や高校駅伝などの競技力向上について、短期的ではなく 3〜4 年を見据えて具体的に議論・検討するよう要望する。

（中谷健康体育課長）
教育委員会もスポーツ課と連携し、学校体育の充実に向けて計画策定に参画している。小学校では体育専科教員の配置に定数上の制約があるため、体育が苦手な教員でも指導できる手引の作成を進めている。部活動では、部活動指導員や外部指導者の活用を進めているが、人材不足や市町村の財政負担が課題。今後、市町村と協議しながら支援のあり方を検討していく。

（南委員）
現行の目指す社会像は、長期総合計画の２・４・５番と重なる部分が多く、県民がライフステージや関心に応じてスポーツに親しみ、生活の質を高めるという点で、ウェルビーイングの考え方がより伝わりやすい。国の計画を踏まえつつも、和歌山県の長期総合計画との整合性を図り、個人の充実やウェルビーイングを意識した表現を検討してはどうか。

（北村企画部長）
目指す社会像は、現行計画の内容を踏まえつつ、国の計画に示された「つながる」などの要素を加え、簡潔で包括的な表現に整理したもの。
「誰もが自分らしくスポーツを楽しむ」は、スポーツをする・見る・支えるなど、人それぞれの楽しみ方を表している。また、スポーツを通じて地域に活力や交流が生まれるウェルビーイングな社会を目指している。県の計画と同様に、県民が多様な意味を読み取れる、シンプルで分かりやすい表現を重視している。

（南委員）
目指す社会像を簡潔にするのであれば、各ライフステージに応じたスポーツへの愛好度や充実度を測る指標が必要ではないか。
現状では、体力テストが主な目標値となっており、運動への好意や活動場所の有無が把握しにくい。また、成人の週１回以上の運動実施率についても、子育て世代など世代別の状況が見えにくいことから、ライフステージごとの実態を捉えられる指標の設定が重要。

（村瀬会長）
スポーツ実施率は、ウォーキングを含むかどうかや年代別の集計方法によって数値や見え方が変わるため、より詳細な指標の提示が必要。
また、ウェルビーイングは社会とのつながり、心身の健康、医療、ひきこもりなど幅広い分野に関係するため、現在の評価指標だけでは十分に把握できない。スポーツがもたらす影響を広く想定し、評価指標を見直す必要がある。